つまずきポイントを
チェック

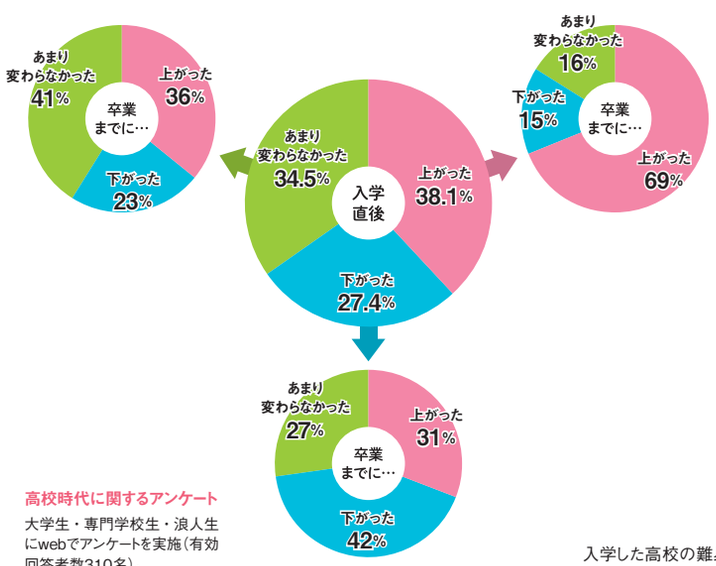
なぜ差がつく？
成績伸びる子、伸びない子

高校に入ると、中学時代と成績の様子が
異なってくることがよくあります。
同じような成績の子が集まっているという
理由だけでは済まされない何かが…。
その原因や解決策を、
先生や大学生たちの生の声などから
考えていきましょう。

監修／佐々木宏先生（東京都立日野台高校）
取材・文／長島佳子

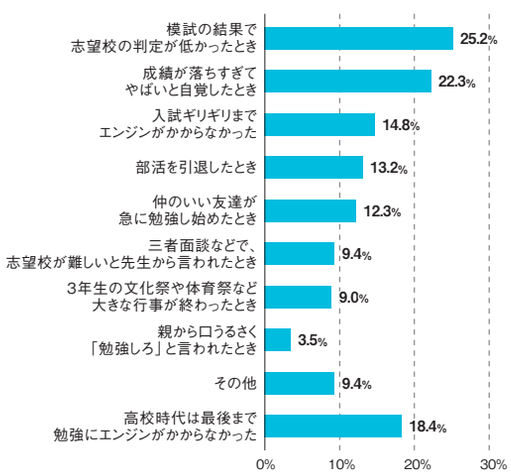
高校を卒業した先輩にアンケート

高校入学直後の成績は?その後卒業までにどうなった?



高校時代に関するアンケート
大学生・専門学校生・浪人生にwebでアンケートを実施（有効回答者数310名）。
実施期間：2017年12月20日～22日（調査協力：マクロミル）

勉強にエンジンがかかったのはいつ?



入学した高校の難易度はそれぞれなので、入学直後の成績は「上がった」「下がった」「あまり変わらなかった」がほぼ3等分。ところが、卒業までの変化は入学直後の成績がそのままリンクした方が最も多い結果に。成績に自覚が出るとエンジンがかかっているものの、卒業までエンジンがかからなかった層も相当数いることが気になります。

元高校生たちに聞きました

なぜ伸び悩んでしまうのでしょう？

成績が下がることにも理由があります。
保護者には屁理屈にしか聞こえないことについての、現場の先生たちの見方は？

case.1

子どもの言い分

自分の成績が下がったんじゃなくて、高校は同じような成績の人が集まっているから仕方ないよね。

先生の見方

確かに中学時代は上位の成績でも、同様の生徒の集団に入れば相対的に成績が下がることはあります。でも、1年次の位置づけで甘んじずにがんばれるかがどうかが問題。

case.2

子どもの言い分

高校は中学よりも科目が細分化されて数が多くなるから、全部一生懸命やるのは大変なんだよ。

先生の見方

科目数に比例して学ぶ量も増えます。でも、授業中に理解できていれば、定期試験ではそれなりの成績は取れるはずなので、授業に集中できていないのでは？

case.3

子どもの言い分

部活も忙しいし、行事の規模が中学とは全然違うから、やることがいっぱいで勉強する暇ないんだよ。

先生の見方

高校では行事や部活の質量が増しますね。大切なのは、自分で考えながら取り組むことです。自分が成長できる場になるよう、他とバランスを取りましょう。

case.4

子どもの言い分

高校の授業は中学に比べてとにかくスピードが速すぎてついていけるワケがない。ムリだわ。

先生の見方

だからこそ、毎日少しずつの家庭学習が大事なのですが、そこから逃げている子が多い。後からのリカバリーが大変なので早めに自分なりの学習習慣を作ってほしいです。

case.5

子どもの言い分

スマホ買ってもらっちゃったからねー。ゲームとかSNSやるのが楽しくてつい時間がたっちゃう。

先生の見方

今の時代にスマホが使えるようになることは必要ですし、持つことが悪いとは言ってません。問題は自分のコントロールができていないことだと思いますよ。

1年生の最初でつまずくと卒業までそのままいくことに

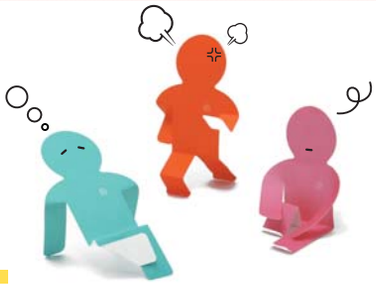
上記の「子どもの言い分」は、前ページのアンケートに答えてくれた先輩たちのなかで、成績が下がった経験のある人にその理由を尋ねたものです。保護者からすると「そんなの成績が上がってる子も同じでしょ！」と思ってしまうような内容。本企画を監修いただいた日野台高校・佐々木宏先生は、高校入学直後の成績順位が、卒業まで大きく入れ替わらないことを懸念しています。

「急に伸びる生徒もいますし、最終的には個の力に寄るところもありますが、多くの生徒は卒業までそのままいきます。成績の順位や偏差値がすべてではないとはいえ、基礎学力がないと3年生で挽回できないので、1年次が大事なのは事実です」（佐々木先生）

中学のときはテスト前にがんばればなんとかなっていたかもしれませんが、そうはいかないのが高校での勉強。進度が速かったり科目が多いことを自覚しているのなら、1年生の最初から日々コツコツと復習していかないと、3年後に泣きを見るのは子ども自身なのです。

現場の先生に聞きました

うちの子はつまずいたりしない？



勉強につまずいたり、逆に伸びる子にタイプはあるのでしょうか？
高校生がつまずく原因について、現場の先生にアンケートしました。

アンケート対象：小誌編集協力委員　アンケート実施期間：2017年12月26日～2018年1月5日

高校の勉強に つまずきやすいタイプ

- 塾依存型で、言われたことをやることだけに必死なタイプの生徒。（京都・私立高校）
- 周りの大人の言うことを素直に聞き、真面目に受験勉強に取り組んできているが、自身の問題として進路選択、職業選択，将来にわたる人生設計等について考えたことがない。素直な良い子と言われているが、しっかりとした自分の意思がない。（愛媛・公立高校）
- 暗記が得意で、いわゆる従来型の授業を受けてコツコツやってきたというタイプ。（山形・公立高校）
- 目標が明確ではない生徒。（山梨・私立高校）
- 自分の意志より親や塾など周囲の意志で勉強していたタイプの生徒。（大阪・公立高校）
- 不器用な子。中学校と違い、高校では消化しなければならない学習量が膨大なため、要領の悪い子や、何でも自分のやり方にこだわる子がつまずきやすい。（和歌山・公立高校）

高校で 学力が伸びるタイプ

- 学習と部活動の両立、多様・多量の学習等をマネジメントできる段取り力をもっているタイプ。（広島・公立高校）
- コツコツと何事においても継続的に行う力が備わっている生徒は運動にせよ、プラスの渦の中を泳ぐことができる。（愛知・私立高校）
- 中学時代、勉強だけしているのではなかった生徒。好奇心が旺盛で、いろいろなことを面白そうと感じられる、今手に入れた新しい知識を、自分のもっている知識とつなげられる生徒。（青森・公立高校）
- 入学という節目で自分を変えよう、成長させようという気持ちで臨む生徒。（大阪・公立高校）
- 教員にやれと言われたことを「すべて」やる（やろうとする）素直な生徒。（静岡・公立高校）
- 暗記するだけでなく、理論や本質を追求する姿勢が強い生徒。（千葉・公立高校）

高校からの勉強の「壁」5

1. **勉強の仕方**がわかっておらず、板書の丸写し、丸暗記で勉強した気になること。
2. 中学に比べて授業の**量**が増え、**スピード**も格段に速くなってついていけなくなること。
3. 中学時の**基礎**ができておらず、苦手意識のある分野を諦めてしまうこと。
4. **家庭学習**の時間が取れず、特に予習をしてこないため授業についていけない。
5. **分析力**、**想像力**が不足していて、何がわからないか自分で理解できないこと。

身の周りに潜む「誘惑」5

1. 圧倒的に**スマホ**。使うことはOKだが、ゲームやSNSにはまって勉強の時間がない。
2. **世界が広がり**、**自由な時間**が増えることで、自己管理ができなくなる。
3. **交友関係**が広がること。良い面も多いが、勉強より友達になりがち。
4. **アルバイト**や**部活**が楽しくなり、授業外の生活が中心になっていく。
5. **恋愛**。最初は良い方向に働くこともあるが、恋愛で問題が起きると勉強にも影響する。

子どもの表面的な行動よりも行動の理由や意味が大事

「つまずきやすいタイプ」「伸びるタイプ」のいずれにも見られた言葉が「素直」と「コツコツ」。

「素直」に見える子どもたちの行動にも、「自分で考えずに、ただ言われたことだけをやっている」側面と、「大人の教えの意味を考えたうえで、やってみる」側面という、二面性があるようです。

同様に、丸暗記するためにコツコツ机に向かっているのと、理解を深めるために自主学習しているのでは、行動の意味が違ってきます。

「高校からの勉強の壁」で先生たちが挙げている、中学との勉強の質・量・スピードの違いは、右ページの子どもの言い分ともリンクし、自他共に認める壁。高校での授業にいかに早く順応できるかが、その後に影響しそうです。

その一方で誘惑も増え、ほとんどの先生が挙げていたのが「スマホ」。高校生に限らずスマホ依存は社会全体の問題です。家庭でのルールを決めるなど、スマホが学習の妨げとならないよう、上手につきあえる手助けはしたいものです。

佐々木先生に聞いた

生徒の伸び方 つまずき方

ここまでアンケートを元に、子どもの気持ち、先生たちの見方を見てきました。
その意味について佐々木先生に読み解いてもらいました。

モチベーションを外圧から「自分の学びたいこと」へ

43ページの卒業生アンケートで、「勉強にエンジンがかかった」きっかけが「模試の結果」や「成績が落ちた」ということは、子どもたちは外圧によって勉強していることを物語っています。

先生方のアンケートでも「中学時代に塾依存だった生徒がつまずきやすい」という回答が多く見られたのも、それまで塾があるから勉強していた、塾で勉強の方法やスケジュール管理も指示されていたということの裏返しだと思います。

また、今までの目標だった「高校入試」という圧力もなくなります。つまり、**塾や入試という外圧がなくなって、勉強に対するモチベーションがなくなっている**のが入学直後の時期で、つまずきやすくなっているのではないでしょうか。「何をどうやって学べばいいか」というマインドセットが一旦なくなるので、それを**新たにセットできた生徒**が伸びていきます。

ただし、新たな目標を「大学に入ること」としてしまうと、大学入学後に同じことを繰り返します。こうした外圧に縛り付けられて勉強するのではなく、自分から「これを学びたい」ということを見つけて、自ら学ぶようにならなければ、これからの社会を生き抜いていくことは難しくなると思います。

将来のビジョンと学ぶ意義をもつことが、偏差値より大事

とても大事なことは、一人ひとりの生徒自身が「何のために学ぶのか」ということを、自分のものさしでもてるかどうかです。「将来、こういう方面で活躍したい」と**ビジョンをもった生徒**は、たとえ入学時の成績が低くても、いずれ自ら学び始めて伸びていきます。

ビジョンは特定の職業でなくてかまいません。今ある職業が子どもたちが社会に出るときに存在するとは限らない時代です。例えば「アジアの人々の役に立てる人になりたい」というようなことでよいのです。ビジョンをもつことは、偏差値の高い低いより、子どもたちにとってはずっと重要です。

しかし残念なことに、今の高校は学校側が大学入学をゴールにしてしまっている面があるところもまだ多いのも現実です。また、部活や行事に関わる時間が多く、生徒の思考が学校の中だけで完結しがちで、こうしたビジョンをもてるようになる機会が少ないと感じます。保護者の方々は学校にお子さんを任せきりにせず、社会人として世の中との接点をつくってあげる役割の一端を担っていただければと思います。

1年次の基礎がポイント 苦手分野を克服しておきたい

ただし、学びたいことが見つかったとしても、どんな分野でも基礎学力は必要です。高校の授業は進度が速いので、1年生でつまずくとリカバリーが難しいため、1年生での学びが大事になります。多くの高校では、1年次の基礎科目をきちんと習得できなかった生徒が、2年次で同じ科目を学び直せるような科目配置がされていません。生徒自ら学ぶことが重要となり、家庭学習している生徒とそうでない生徒で差が出ます。

1年次の基礎ができて、社会と触れることで自分自身が学ぶ目的を見つけられれば、どんな生徒でも自ずと学び出す力があると、私は信じています。

東京都立日野台高校
佐々木 宏先生

指導教諭。国語。生徒の学びと社会とのアクセスポイントを多種多様な形で創り出すために、授業や行事、部活動を、大学、大学院、NPO法人、企業、文科省、東京都、地域、保護者と連携して行っている。

＼大学生に聞いた／

高校時代の成績変遷実録

既に高校生活を体験済みで、大学に進学した先輩たちは、
高校時代にどんな成績の変遷をして、何をしていたのでしょう？
現在は充実した大学生活を送る3タイプの学生に、ナマの体験を聞きました。

［ じわじわ安定上昇 ］

**中学から志望校が
決まっていたので、
目標に向かってまっしぐら！**

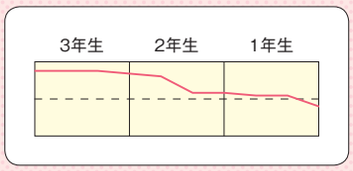
私立大学1年女子
（私立高校出身）

中高一貫校で同じ部活の先輩がW大学の国際教養学部に入学。それをきっかけに、中2のときに第1志望に決めました。でも高校に上がるとき、偏差値でW大の下の大学群にも入れない評点で。3年間で絶対がんばると決意しました。予習・復習をちゃんとやり始め、小テストごとに満点を目指して、1年の1学期は面白いように成績がアップ！でも2学期以降は中学でがんばってた子たちにかなわなくなってきて。勝手に仮想ライバルをつくって「あの子に勝ちたい！」とさらにがんばりました。

2年生からは、朝7時に学校に行って勉強しました。うちの部は2年の秋に引退。運動部の子たちは部活を続けていたので、さらに成績が上がっていきました。けれど、学年末の模試で第1志望はE判定。自分自身の成長は実感できたので気にしませんでした。3年になって運動部の子も引退すると、一緒にがんばることが刺激になりました。

結果的には第1志望の学部はダメでしたが、W大の別の学部に合格！今ではさまざまなことが学べる学部に入ってよかったと思っています。

●ペースはいろいろでも3年間地道に上昇



［ 逆転V字回復 ］

**推薦を目指し1年生で奮起、
部活にのめり込んで急降下。
でも最後はがんばった！**

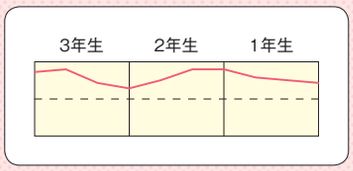
私立大学2年女子
（私立高校出身）

中学時代に家族旅行でディズニーワールドに行って以来、「ここで働きたい！」と。父が、私の好きなことを将来に結びつけるように会話してくれる人で、「英語が好き、ディズニーのサービスが好き、接客の仕事が好き、だったら何を学べばいい？」など導いてくれた気がします。

中学3年間を海外で過ごしましたが、地元に帰国子女枠のある高校がなく、必死に勉強して英語教育重視の学校に入りました。もう受験したくなくて、大学は初めから推薦を狙うことに。推薦は1年生の成績から大事なので、がんばって成績も上がっていきました。

けれど2年生になって部活にのめり込んでしまって。運動部なので帰宅したらもうヘトヘトで成績は急降下。部活引退のころ、今の大学の指定校推薦を先生から薦められました。オープンキャンパスで英語の模擬授業を受けて気に入りました。推薦でもTOEIC（R）テスト受験が必須だったので、そこからまた奮起して合格できました！　一度成績が落ちても復活できたのは、ちょっとずつコツコツはやっていたからだと思います。「継続は力なり」だと実感します。

●部活での急降下は、引退後に挽回！



［ 気まぐれ乱高下 ］

**勉強も遊びも楽しすぎて乱高下。
でもビジョンがあったから
落ち込まなかった。**

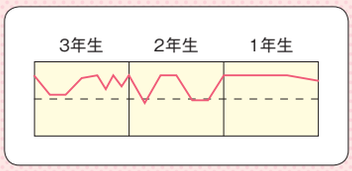
私立大学3年男子
（私立高校出身）

高校は特進クラスで、入学してすぐいい友達ができました。6人ぐらいの仲間で教え合いながら一緒に勉強していました。1年のころは順調に好成績を維持。けれど、2年になって友達と遊ぶのも楽しくて、わかりやすく中だるみしましたね。一緒に遊んでた子がいい成績を取ると焦ったり、自分も他の子も遊んでるから、原因もわからず成績が乱高下していました。

でも自分にはいつも、いい影響を与えてくれる大人が周りにいました。中学のときの塾の先生が「なんで勉強するのか、目的意識をもたないとダメだ」と教えてくれました。だからいつも「自分は何になりたいかな」と考えていました。父は「勉強しろ」とは言わず、自分がスポーツ推薦で進学して、勉強せずに社会で苦労した話をしてくれていました。高校の進路指導の先生も、成績が落ちてたときも「期待している」と声をかけてくれました。そうした人たちの期待に応えたいと思っていました。

今の大学は第1志望ではありませんでしたが、将来金融関係の仕事につきたくて、学びたいことを学べています。

●自分もがんばれば周りもがんばる相対的乱高下



ついロ出ししたくなるけれど…

子どもの勉強に保護者の出番はある？

これからのわが子が歩む道が少し見えてきたでしょうか？
今の時代に、保護者が子どもの学びを支援する方法を考えてみましょう。

「勉強しなさい」の声かけは言ってもよいが効果なし

クラス内での順位や模試の成績で、保護者も子ども自身も一喜一憂しがちなもの。成績が下がって本人が落ち込んでいれば保護者は心配になりますし、下がっているのに遊んでばかりいると「勉強しなさい」と言いたくなります。

しかし、46ページの佐々木先生の話のように、「将来これをするために学ぶ」「今学んでいることは、自分のやりたいことにつながりそうだ」という、勉強へのモチベーションが子ども自身から湧き上がってくることが、勉強が身に付く最も大きなエンジンになるようです。

保護者は社会と子どもをつなぐアクセスポイント

勉強するのも、将来の進路を決めるのも子ども自身。保護者が関わるべきことはないように思えます。しかし、今の時代に保護者の役割は大きいと佐々木先生は言います。

「子どもたちが将来のビジョンをもつためには、今の世の中がどうなっていて、社会には自分にとってどんな可能性が広がっているのか知る必要があります。学校では情報として与えることはできても、リアルな体験をさせるには限界があります。それができるのが、社会人として活躍している保護者です」（佐々木先生）

ほとんどの保護者は職業をもっています。学校の中だけにいると、子どもたちは「教員という職種の社会人」しか知ることができませんが、保護者が集まれば、多様な社会と生徒たちをつなぐ窓口となれる可能性があるのです。

「そのために、家庭の中でも、保護者自身の仕事の話を子どもにしてほしいです。子どもが社会人となったときに保護者はまだ現役で働いています。60歳以降も働き続けることが普通になる社会で、また将来の予測がつきにくいこれからの10年先、20年先、保護者自身が、自分自身の、そして家族のライフをどのように送ろうとするのか。子どもと一緒に対話し考えてほしいと思います。15歳は既に、家族や仕事を共に語り合うのに十分な相談相手ではないでしょうか。

また、保護者はもっと先生や校長と対話するとよいと思います。子どもの教育に対して、学校が『主』で家庭が『従』ではなく、パートナーと考えた方がよいのではないでしょうか」（同）

例えばPTAの行事として、保護者たちの仕事を見せるような企画を学校にもち込み、外の風を学校に吹き込む手もあると言います。そうしたアイデアは、実は保護者の方がもっているかもしれません。

また、保護者以外の大人との接点をつくることも、子どもが将来のビジョンをもつことに役立ちます。

「例えば震災後のボランティアに親子で参加した生徒などは、その後の生き方に大きな影響を受けて帰ってきます。子どもは学校の中だけで成長するのではないと、思った方がいいですね」（同）

子どもが自立できるようさまざまな役割がある

子どもが学びたいことを見つけて、志望校を探し、そこに入るためにもっと勉強したいと言ったときに、保護者には教材を購入したり、塾や模試のための金銭的な支えも必要となります。忙しくしている子どもが、毎日元気で学校に通えるように健康管理をしてあげるなども保護者の役割です。直接勉強に口は出さずとも、子どもの学びへの意欲を高めるために、保護者の役割は物心共にたくさんあるのです。

生活や金銭的な支えとしての役割

- 睡眠時間や食事など、不規則な生活にならないように生活リズムの応援
- いつもと様子が違って落ち込んでいたら、声をかけてみる
- 模試を受ける際にその都度費用の準備
- 塾やWeb学習サービスをやりたいと言ったときの費用の準備

社会人の先輩としての役割

- 保護者の仕事や生き方に子どもが興味をもってきたときに話してあげる
- 保護者以外の大人に会わせたり、旅行に行くなど、学校ではできない経験や社会を見せる機会をつくる
- 子どもと社会をつなぐ授業がなければ、学校に協力するなど働きかける

「やっぱり塾？」、その前に

子どもの学力見守りポイント

偏差値より将来のビジョンが大事とはいえ、学力は必要です。
子どもが目標に向かって必要な学力を身に付けているか、ポイントを押さえておきましょう。

●見守りポイント1

中学レベルの基礎学力はちゃんと習得できている？

子どもがつまずきやすいポイントとして、先生たちのアンケートで多かった回答が「中学レベルの基礎ができていない」こと。例えば数学の「移項」という言葉を国語的に理解していないと、本来簡単に解ける問題も解けないことになります。授業の進度が速くなる高校で、このような中学で習得しているはずのことでつまずいていると、授業の初めからちんぷんかんぷんな思いをしているかもしれません。

中学時代に極端に不得意科目があった場合など、早めの時期に対応しておかないと、子どもが「もう無理」と最初から諦めてしまいかねません。学校によっては、ICTを活用して中学レベルの基礎問題を解かせ、苦手科目だけでなく苦手単元まで特定し、学び直しを促す取り組みも始まっています。

●見守りポイント2

1年生の1学期の中間テスト・期末テストはしっかりチェック！

佐々木先生も述べているように、高校入学直後の成績が卒業まで影響するのはよくあること。子ども自身は、高校受験が終わって勉強に対して一段落しており、「しばらくは部活や学校生活を楽しもう」、「3年で部活を引退したら受験勉強をがんばろう」と考えがちです。しかし、高校は授業の進度が速く、勉強の量が多いため、基礎を学ぶ1年生の段階でつまずいてしまうと、3年になってからでは手遅れということも…。

また、急に勉強の内容が難しくなったり、塾から離れたことで勉強の仕方がわからず、高校の勉強に戸惑ったまま定期テストに臨むことに。その結果、成績が振るわず、自信を失うケースも少なくありません。子どもがどんな状態で高校での勉強をスタートしているか、1学期の定期テストの結果は保護者もチェックしておきましょう。

●見守りポイント3

子どもは自分の弱点をちゃんと把握できている？

勉強につまずくきっかけにも挙げられていた「何がわからないか自分で理解できていない」こと。思うように成績が上がらなかったり、授業についていけてないと感じていても、その原因を子ども自身が把握できていないことがあります。例えば漠然と、「数学は嫌い」とか「確率が苦手」と思っていても、確率の何が苦手なのか、なぜ問題が解けないのかが自分でわかっていないのです。

しかしそれを自分で把握するのは簡単ではありません。成績表などに記されている内容は、「科目への意欲」「科目に対する技能」など大ざっぱな項目です。個別に先生から対応してもらえていない限り、自分の弱点は見つけにくいもの。子どもの成績を責めるのではなく、勉強や成績に対する悩みを聞き、受け止めてあげることで、本人が弱点に気付くための時間を作ってあげるのもよいかもしれません。

●見守りポイント4

弱点を克服して伸ばすための、「学校の授業+α」が塾でいい？

子どもが「弱点を克服したいから、学校の授業だけでは足りない」と言ってきたとき、「じゃあ塾に行く？」と考える保護者も少なくないと思います。中学時代に塾に通っていた場合はなおさらです。ただし、先生たちも指摘しているように、塾にもよりますが、塾依存で受身的な勉強をしていると、自分で勉強する方法がさらに身に付かなくなる可能性もあります。また、同じ「数学が苦手な子ども」でも、つまずいているポイントは子どもそれぞれ。学校の授業でついていけないのと同じことが、塾で繰り返されることも考えられます。

自分の弱点を重点的に学べるスタディサプリのようなWeb学習サービスなどの方が、子どもに向いている場合もあるので、さまざまな選択肢の中から、子どもの状態に合った学習方法を一緒に選ぶとよいでしょう。